氏名（本籍）	佐藤　有香　（東京都）
学 位 の 種 類	博士（児童学）
学 位 記 番 号	博甲第 49 号
学位授与年月日	令和 3 年 3 月 15 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当 児童学研究科　児童学専攻
論　文　題　目	保育者の経験年数における「子ども理解」の違いに関する研究
論文審査委員	主査　教授　　相良　順子 副査　教授　　阿部　真美子 副査　教授　　小野瀬　雅人

論文内容の要旨

【問題と目的】

近年保育者に求められる職務は多様化し，更なる専門的力量が求められる中，実際の保育現場では，早期退職や離職率の高さが深刻であり，専門的力量の体系化や段階的確立が大きな課題となっている。これまでの保育者の専門的力量の議論は，保育者の専門性とは如何なるものかを問う総体的なものが殆どで，具体的な専門的力量に特化し，その力量形成について検討されている研究は少ない。そこで本研究では，保育者(幼稚園教諭免許，保育士資格を有する現職者)の専門的力量の中核とされる「子ども理解」を取り上げ，その力量が経験年数を重ねる中でどのような違いがみられるか，量的，質的異なるアプローチから多面的に検討していく。そのため，まず，①保育者がどのような点に着目し，子どもの心情やあり様を理解しているか，「子ども理解」の具体的な視点の構造を明らかにする。次に，②「子ども理解」の視点が，経験年数を重ねることで変化があるのか，また経験年数による違いがあるのか検討していく。最後に③「子ども理解」の変化が，実践経験の中でどのような契機で生じるか検討していく。以上を踏まえ，保育者の経験年数による「子ども理解」の視点の変化と実践経験の中での「子ども理解」の変化との関連を明らかにし，「子ども理解」の力量形成における具体的支援を解明することを目的とする。それにより保育者の専門性を高めるための有益な示唆を得たい。

【研究の概要】

＜研究 1＞では，保育者が子どもの内面や心情のあり様を理解する際に，どこに着目して理解を進めるか具体的な視点の構造を明らかにすることを目的に，子どもの映像視聴による対象児の心情推察に対する自由記述の回答から「子ども理解」の視点カテゴリの抽出を行い，精緻化を試みた。その結果，「子ども理解」の視点カテゴリについて，上位カテゴリとして，【外面的理解】，【内面的理解】，【背景】，【他者の内面的理解】の 4 つのカテゴリが抽出された。また，【外面的理解】の下位カテゴリは，「行動」，「発言」，「表情」，「外面的理解その他」の 4 点であった。【内面的理解】の下位カテゴリは，「動機・意欲・欲求」，「感情・興味・関心」，「認知・思考」，「内面的理解その他」，の 4 点であった。そして【背景】のカテゴリは，「人間関係」，「環境」，「家庭」，「発達」，「性格」，「身体面」，「背景その他」の 7 点の下位カテゴリが見いだされた。

次に，＜研究 2＞では，＜研究 1＞で得られた「子ども理解」の視点カテゴリが，保育者の経験年数により違いがみられるが，経験年数 3 年以下の新任者と経験年数 10 年以上の熟練者との間で，映像視聴による子どもの心情推察の自由記述での回答を分析し量的検討を行った。そこでは，新任者は，子どもの観察可能な事柄である「行動」や「発言」等に着目し理解を進め，子どもの考えている事柄を推察する際には，根拠のない独自の推測や指導的立場から理解を進めていくことが明らかになった。一方，熟練者は，目の前の子どもからは観察することが出来ない「背景」に着目し，多角的視点から「子ども理解」を行うという差異が示された。

＜研究 3＞では，さらに経験年数の区分を細分化し，新任者，熟練者と，経験年数 4 年から 9 年までの中堅者を加え，＜研究 2＞と同様の方法で 3 者間による「子ども理解」の視点の違いを検討した。その結果，新任，中堅，熟練と経験年数の増加に伴い，より多くの手がかりを目の前の子どもの状況から見出し理解を進めていることが明らかにされた。また熟練者は，子どもの観察可能な事柄だけでなく，子どもの発達的側面や人間関係等「背景」に着目し，さらに対象児以外の周囲の他者の行動や動き等「他者の外面的理解」を含め「子ども理解」を行ってることが明らかになった。

次に，これらの経験年数による「子ども理解」の視点の違いが，実践経験の中でどのような事柄がきっかけとなり変化が生じたか，その契機に着目し，保育者の個人的経験の語りから新任期，中堅期，熟練期と経験年数による違いについて，質的に検討を行った。

＜研究 4＞では，公立保育所に勤務する 3 名の新任者を対象に，半構造化による面接調査を実施し，1 年間の「子ども理解」の状態と変化の契機を検討した。その結果，実践開始間もない時期は，「子ども理解」を行う段階には至らず指導的なかかわりや安全重視のかかわりが優先され，手探りの状態であった。そして年度終盤では，徐々に「子ども理解」の視点に広がりみられ，子どもの心情や内面推察を踏まえた上での保育行為へと変化がみられた。また，「子ども理解」の変化の契機については，熟練者の存在，子どもに対する情報の統合による多角的視点の獲得，異なる立場の経験，対象となる子どもの姿等の

機会が見いだされた。

＜研究 5＞では，公立保育所に勤務の中堅者 3 名を対象に，半構造化による面接調査を行い，これまでの実践経験の振り返りから「子ども理解」に変化をもたらす契機について検討した。その結果，新任期の契機は，同僚や熟練者等の他者の存在，対象となる子どもの姿，養成校・学生時代の経験の 3 点の契機が見出された。そして中堅期の契機としては，同僚や熟練者等の他者の存在，養成校・学生時代の経験，実践以外の研修や勉強の機会の 3 点が示された。なかでも，養成校・学生時代の経験は，本研究で新たに見いだされ，新任期，中堅期で共通の契機とされていたため，「子ども理解」の力量形成では，学生時代の経験が基盤となることが示された。

＜研究 6＞では，公立保育所に勤務の熟練者 3 名を対象に，＜研究 5＞と同様の方法で，これまでの実践経験から「子ども理解」の変化の契機について分析を行った。分析の結果，対象となる子どもの姿，熟練者の存在，保育者以外の異なる立場の経験，養成校時代の経験，園全体での課題共有の 5 点が契機として見いだされた。この中で，園全体での課題共有の契機については，熟練期の保育者のみでみられた契機であり，また本研究により新たに見出された結果であった。このように，保育者が実践経験の中で，「子ども理解」に変化をもたらす契機は，養成校時代の経験に端を発し，新任期の熟練者の存在，その後個人のライフステージの変化による保育者という立場以外の異なる立場の経験，熟練期での園全体の課題共有等，それぞれのキャリアの段階による契機の違いが明らかにされた。

以上，本研究で得られた結果から，保育者の「子ども理解」の力量を形成していくうえでは，養成校時代には，自分自身の子どもに対する心情理解を客観的に振り返る力を身に付けること，実習先や授業内で「子ども理解」の根本的理念に触れることが重要であることが示された。また，新任期から中堅期に掛けての保育者にとっては，経験者による援助が「子ども理解」の変化に大きな影響を与えるため，モデルとなる熟練者や「子ども理解」の視点を提供する存在が重要である。それと同時に，園環境としては，子どもの心情や関わりに対して率直に意見交換できるインフォーマルな体制整備を行うことが「子ども理解」の変化につながることが示唆された。そして，中堅期には，自力での「子ども理解」が通用しない場合，熟練者が中堅者の保育行為の意味づけや子どもの心情解説を共に行うこと，新たな知識獲得や研修で，他者の「子ども理解」の見解に触れることが，「子ども理解」の変化に寄与することが示された。最後に，熟練期では，保育者個人の力量では解決が困難な事例が発生した際に，園全体での課題共有が図られることが，「子ども理解」の変化には重要であることが明らかにされた。このように，保育者の専門的力量の一つである「子ども理解」の力量形成を行う上では，新任期から熟練期と経験を重ねる中で，子ども心情を読み取る個人的能力と，園全体の資質向上体制の両者が整うことでその力量が向上していくことが示された。

博士論文審査の要旨

審査委員会は、「課程博士の学位論文審査等に関する内規」第15条に基づいて博士論文等の審査を下記のように実施した。

１．公開試問

公開試問は令和３年１月30日(土)13時～14時、８号館６階ゼミ3･4教室において実施された。博士論文の内容について発表後、その内容と関連事項について質疑応答が行われた。公開試問における発表は、博士論文としての学術レベルを満たすものであった。また、質疑に対する回答も適格であり、十分な学識を満たすものであった。

２．審査委員会

審査委員会は公開試問終了後、発表者に追加質問を行った。公開諮問・追加質問の結果を踏まえ博士論文の可否を審議した結果、審査委員会は、全員一致で論文内容は学位論文として価値あるものと判断し、この結果を児童学研究科委員会に報告することとした。

３．博士論文の内容と成果

（1）論文構成

本論文は、5つの章、本文163頁、付録資料等13頁、図表26葉から成っている。

（2）論文の内容と成果

本論文は、保育者の専門的力量の中核である「子ども理解」を取り上げ、その力量が経験年数によりどう異なるのか、また、どう変化するのかについて、量的、質的アプローチから検討することを目的としている。その検討は、第1章における「子ども理解」に関する先行研究のレビュー及び目的の設定、第2章、第3章における「子ども理解」の視点の整理と調査による量的研究、第4章における「子ども理解」の変化とその契機についての質的研究により行われた。その結果、以下のことが明らかになった。

① 「子ども理解」の視点は、「外面的理解」「内面的理解」「背景」「他者の内面的理解」の４つの上位概念とそれぞれの下位概念から構成されることが示された。

② ①で見いだされた「子ども理解」の視点カテゴリーを基に、新任者と熟練者の違いを検討した結果、新任者は「外面的理解」、熟練者は「背景」に着目する傾向が明らかとなった。

③ 「子ども理解」の変化の主な契機として、新任者は、熟練者の存在、中堅者では同僚や熟練者の存在に加え研修経験など、熟練者では園全体での情報共有であることが示された。

以上の主要部分は日本家政学会、教師学会の論文誌他で公表済みである。

（3）今後の課題

今後の課題としては対象施設を広げ、保育者の「子ども理解」を変化させる熟達化プロセスを詳細に検討すること等が挙げられた。

試問の結果の要旨

審査委員会は、「課程博士の学位論文審査等に関する内規」第15条に基づいて博士論文等の審査を下記のとおり実施した。

１．公開試問

公開試問は、令和３年１月30日（土）13時～14時、8号館6階ゼミ3･4教室において実施された。博士論文の内容について40分の発表後、内容及び関連事項について20分の質疑応答が行われた。その後、別室において審査委員会は発表者に追加質問を行った。いずれの質疑に対する回答も適格であり、十分な学識を満たすものであった。

公開試問･追加質問の内容は、以下のとおりである。

・今後、多様な保育施設の保育者に対象を広げ、違いを検討することについて
・保育者の、特に中堅者におけるキャリア発達について検討することについて
・経験年数以外の指標から経験の違いを検討することの重要性について

２．試問の結果

審査委員会は、公開試問終了後、別室において博士論文の可否を審議した。その結果、試問担当者は、本論文が学位論文として価値あるものと判断し、全員一致で合格と認めた。